

# ARTICLE

## 蛸壺を壊すレシピ

NPO法人えひめ子どもチャレンジ支援機構事務局長 仙波英徳

### はじめの一歩

1992年、何の課題意識もなく役回りからPTA役員を引き受けた。しかも、3年後には、PTA連合会役員までも順送りであったり、7年間連合会役員（内4年間は会長）を務めた。その当時の文部科学省は、教育改革の真ただ中で「ゆとり教育」「総合的な学習の時間」「生きる力」と聞きなれない言葉を発信していた。だが、目の前の子どもとは遊離していると感じ、現状把握のために松山市の子どもとその保護者3万人に「子どもの生活実態調査」アンケートを実施し、クロス分析して、今後のPTAの在り方について提言することにした。出てきたのは、想定していたのとは全く違う驚くべき結果であった。親友

のいる子は8割いたが、何でも相談できる友人は1割もない。直近2週間で話した大人は母親・学校の先生・塾の先生で、父親は少なく、まして近所の大人は皆無し、子どもの人・社会・自然との関わりが大変希薄な状況が浮き彫りになった。

そこで、2001年に「地域と学校を結ぶPTA」をスローガンに、学社融合パイロット校の選定を教育委員会に提言し実施。子どもを取り巻くコミュニティづくりの研究を始めた。

さらに、讃岐幸治先生を委員長とする「心の教育研究室」や村上伸二先生を委員長とする「YOUNGOネット委員会」を特別委員会として設置し、実践例の収集と検証に努めた。



仙波 英徳

(せんば ひでのり)

11年間のPTA活動の後、社会教育主事講習を受講し2006年「NPO法人えひめ子どもチャレンジ支援機構」を設立。「御五神島無人島体験事業」や、異分野交流会「地域教育実践交流集会」事務局を担当しながら、自称民間「社会教育主事」として子どもを真ん中においた活動を続けている。

その結果、学校の垣根も高いし、公民館の成人教育施設という垣根も一筋縄では超えられないなど、社会構造的な問題のあることが明らかとなった。

そこで、社会教育主事講習が社会教育経験者も受講できるようになった2004年、それまでの実践を見直し、経験値ではなく体系的に社会教育を学ぼうと、愛媛大学でPTA仲間5人と受講することに思い至った。

2005年からは、縁あって住んでいる久米地区の久米公民館運営審議会委員長に就任し、公民館で子どもの育ちを意図する事業を学校と協働で実践していくことになった。様々な場での学びを具体的な実践に移せる、またない機会を与えて戴いたものと、今で

も感謝している。

## 私の地元での取り組み ―久米公民館の実践例―

まず、公民館発で学校と組んだ事業を紹介したい。

2002年 久米中学校の校歌に歌われている「芝が峠」(久米地区にある故郷の名勝地)にて親子での「蝶とりウォーク」大会。音楽教諭を指導者にして、学校の音楽室で子どもと大人と一緒にコーラスを学ぶ「第九を歌おう」。

これらの活動は、いわばイベント的な性格が強く、参加者は盛り上がりを見せるものの地域社会の在りように刺激を与えるほどの力はなかった。

そこで、より継続性のある活動を模索する事とし、次のような取組を計画、実施する。

2003年 「芝が峠」麓の耕作放棄されているミカン園を、子どもと大人で農業体験や自然体験をする場とする「里山づくり」。この事業は、地域挙げての活動の活性化に大きな刺激となった。地域住民だけでなく、小中学生を公民館に呼び込む事業展開の大きな契機となったのである。

2005年 子どもの居場所づくり事業として、学校施設を開放し、愛媛大学教育学部の学生が企画する「わくわくチャレンジサタデー」を始めた。これは、久米小5・6年生を対象に隔週土曜日に「こころづくり」「からだづくり」を目的に開催した。大学生は教育実習では経験できない長期に子どもと関わる事で、子どもの成長と学級経営の楽しさを学んでいく。この仕組みはその後、愛媛大学地域連携実習の先駆となっていた。

2005年 里山の下にある鷹子運動公園で、4年生が1泊2日で野外キャンプをする「里山ワクワクキャンプ」を始めた。2年間の試行後、2007年からは200名余りの小学生に、中学生・教諭・地域ボランティアが多数集う事業となった。里山づくりを契機として広がった地域ボランティアの輪は、次の活動で質的な転換を遂げる。

2005年 東京の「NPOしようち」の提案で、まちあるきワークショップによる「安全・安心マップ」づくりを始めた。これは、小学生・中学生・大学生・教諭・地域住民が協力して、新一年生用に地域のいい所・気を付け

たい所を地図に書き込むマップである。毎年更新し、8年間続けた。

2008年 制作を依頼した筑波大学渡研究室の学生は、下記の趣旨をマップに記載した。

このマップを手にとってくれたあなたへ

あなたのまちはどんなまちですか？

いいところ、ちょっとよくないところ…

いろいろあるとおもいます。

でも、それぜんぶまちの「こせい」です。

そんなまちのこせいをみんな育ててほしい、

みんなが楽しく暮らせるまちに育ててほしい、

と思いこのマップをつくりました。

どうぞ、みんなでつかってください。」

もちろんマップづくりは手段であって目的ではない。ワークショップで発見した危険箇所は、例えば下枝が茂りすぎ見通しが悪くなった公園の下枝伐採

や、防犯灯の設置などは、すぐに改善していった。2010年 国道高架下に

あり雨が降っても遊べる利点はあるが、テニスコート4面分の広さなのにフェ



高架橋脚アート

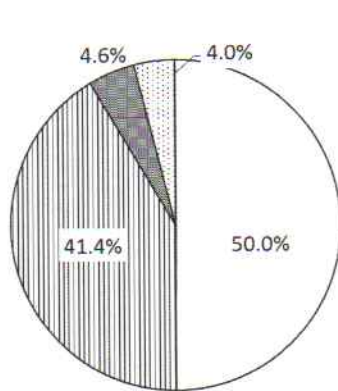


平成31年2月里山風景

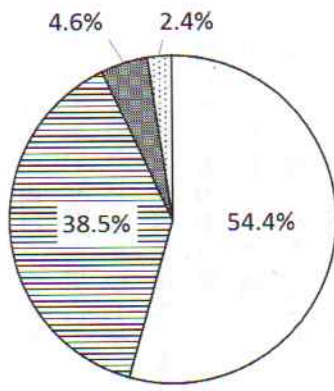
ンスで囲われ出入り口が2カ所しかないため、防犯上の不安感がある「福音公園」の危険性が指摘される。そこで、高校生ボランティアによる公園内の柱（高架橋脚）にアートを施すことで、見守り量や住民の関心を高める取り組みを始めた。今では6本の橋脚に縦4m横3mのアートパネルが設置されている。さらに、この事業は東日本大震災の後、防災マップづくりに進化し、岩手県住田町との交流事業にも繋がった。住田町で実際に使用された木造仮設住宅を里山に移転設置し、地域の防災モニュメントとして活用している。

2006年 子どもも「まちづくり」に参加したいと、里山に小学6年生の卒業記念制作品の「埴輪」設置が始まる。埴輪は毎年200体増えていき、現在では2800体を超え地区の名勝となっている。2009年 高校生の提案から「通学合宿」を始めた。コロナ禍で中断するまで11年間続いた。通学合宿で子どもの「食」をみていると、好き嫌いが多く、食が細い、箸の持ち方がおかしい子が年々多くなってきた。2017年小学校で孤食率のアンケートをとると、夕食を子どもだけで食べている子が8・6%いた。また、孤食の問題は独居高齢者にもある。そこで、公民館で高齢者と子どもと一緒に夕食を食べる、孤食対策啓発事業「ふれあい食堂」を始めた。1年後の2018年のアンケートでは子どもの孤食率が7%となり、1・6%改善した。

このように、公民館と学校が課題解決の協働事業を実施すると、必ず新たな地域課題に気づき、それを解決する事業が見つかる。事業が事業を、ポランテ



2017年



2018年

小学生の夕食状況改善比較

イアがボランティアを呼ぶ込む好循環が生まれた。

### より広い視野に立った取組み ― チャレンジを支援するNPOの設立 ―

2006年、愛媛大学の讃岐幸治教授が退官するにあたり、先生にお世話になった愛媛県の社会教育関係者が集まる一泊二日の交流会を企画した。この交流会のシンポジウムで、今の子どもの課題として「チャレンジする機会と意欲の欠如」が指摘された。そこで参加者180名の賛同を得て設立したのが、「NPO法人えひめ子どもチャレンジ支援機構」である。

### NPOの実践例

#### ① 御五神島無人島体験事業

2008年、20年続いた文科省委託事業「無人島体験事業」の予算が付かなかった。しかし、愛媛県教育委員会としてはこの事業は愛媛教育の柱であるので存続したかった。そこで、NPOと協働による実行委員会方式で事業継続を図りたいと打診があった。

無人島体験事業とは、愛媛県南予の宇和島の沖合にあり最寄りの港から渡

船で40分ほどの御五神島をベースに9泊10日、ガスも水道も電気も無い無人島で、40名程度の子どもが6班に分かれ、班付きリーダーの教諭とスタッフが共同で生活する事業である。

設立して3年目のNPOに毎年300万の費用が掛かるこの事業は荷が重い。また、40名程度の子どもでは費用対効果が悪いと思った。しかし、この事業に参加する小中学生たちが不足・不便・不自由な9泊10日の過酷な体験を通して、仲間の大切さや協力の価値を再認識したり、家族への感謝の気持ちを深めたりという、子どもの心身の成長を促す貴重な機会を無くしてはならないと考え、協働に参画することにした。2017年にはかつての参加児童が、教師になり指導者として参加してくる。事業を続けていて本当に良かったと思った。

#### ② 地域教育実践交流集会

2007年 国社研で開催された「日本ボランティア学習学会」で伊藤俊夫先生にお会いした。PTA役員の方に先生が編集された本をむさぼり読んだ事もあり、一度愛媛に来てくださいと依頼した。讃岐先生に相談し企画した

のが2008年から始めた「地域教育実践交流集会」である。

第1回での讃岐世話人代表の挨拶を抜粋する。

「それぞれ各地域で、ユニークな活動を行っておられます。それぞれが単独でバラバラに活動をしている。そのために、だれがどのような活動をしているかわからない。お互いにだれが、どのような活動をしているか、さっぱりわからない。孤軍奮闘の状態であります。

だれがどんな活動をしているのか、お互いが情報交換する機会があってもいいのではないか。それぞれの活動のユニークさ、面白さを伝え合える機会があってもいいのではないか。(中略)

だれもが、どのグループにしても、多くの問題、悩みを抱え、まさに悪戦苦闘しているのが実態でしょう。互いに悩み、苦しみ、課題をさらけ出し、ぶつけ合う機会があってもいいのではないか。そんな場があるのではないか。本音で語り合える場があるのではないか。一つには、そういう機会になればと地域教育実践交流集会を開催してみたいわけがあります。」

行政等が縦割りで動員するのではなく、NPOの呼びかけらしく参加者が手弁当で自主的に参加する学会方式で開催した。集会の範囲は、初期は愛媛を中心に四国や九州などの同志に呼び掛けた。最初の3年間は大人だけだったが4回目からは高校生・大学生の実践発表を呼び込み、ジャンルだけでなく年齢の壁も乗り越えるようになった。それが好評となり、エリアも徐々に広がりが、現在では北海道から沖縄まで全国規模に広がっている。さらに、8回から3年間は文科省委託事業となったことで、9回からは愛媛県内の東予、中予、南予の3カ所のブロック集会も開催し事業の厚みを増した。13・14回はコロナ禍でリアルな集会は出来なかったが、せっかく出来た繋がりを何とか続けようとリモートで開催した。さらに、リモートの利点を生かして、13回からは、集会后にスピノフと称して小グループでの集会を5回追加で開催した。14回の運営の様子等は、国立教育政策研究所社会教育実践研究センターの情報番組「社研の窓」の取材を受け、HP上で動画配信されている。

### 持続的な発展に地域の原体験を豊かに

自立から自律する地域社会への課題の一つは、地域や人には多様な価値観が混在していることだろう。もちろん多様な価値観があることは素晴らしいことで、互いの価値観を相互に認め合うことが基本である。しかし、問題は互いの価値観を相互理解せずに、無視したり、排除したり、抑え込んだりすることが多々あることだと思う。

しかし、価値観は違ってもみんなの心の中に通底するものがある。その通底するものとは何だろう。思うに、それは、人は自分の興味関心があることに、価値があると思うのではないか。つまり価値の源は、各自の興味関心度とも言える。それなら、社会教育に興味関心がある人を今より多くしていけば、地域活動に価値を見出す人が増え、地域継承の担い手が厚くなる。

団塊の世代は退職後に、地域に帰ると言われていたが、帰らなかった。なぜだろう。企業戦士で戦ってきた世代は、子どもの頃に地域活動に参加する経験が少なかったようで、地域（故郷）への興味関心が薄く、退職後に地域活動に参加する垣根が高かったのではないだろうか。

うか。今の子どもも地域に公民館があることすら知らなかったり、地域の歴史に無頓着だったりする子が多い。つまり、地域にとっしりと自らの根を下せていないように思うのである。かつての企業戦士と同根とは言えないだろうか。

子ども時代に地域活動に参加した経験の豊かな子は、地域の自然や伝統・文化に興味や関心を深めるとともに、活動に関わってくれた人々との確かな絆も醸成されよう。人とつながり、自然や文化・伝統などとのつながりを通して子どもは地域に自分の根を張り、地域に生き、生かされている自分を実感できる。そして、やがて大人に成長したときには地域活動に強い興味や関心を示し価値を見出すと思う。

地域教育力が衰退したのではない。地域に子どもが出てこなくなり、見えなくなり、教育力を発揮していく場が無くなっただけなのだ。その状況を打破するには、今こそ、社会・学校・家庭教育の蛸壺をぶっ壊し、地域と学校が協働して、子どもを中心に据えながら、それぞれの地域性を強く生かし、主体的な事業展開を推進することが、社会教育に望まれていると思う。